

後期ボードリヤールの社会理論の社会学的検討¹⁾

水原俊博（信州大学人文学部）

[要旨]

本稿では、フランスの社会理論家ボードリヤールの理論的軌跡を振り返り、90年代以降の後期の業績を、情報社会論的ポストモダン論を展開する時期として、位置づけることを提案する。さらに、後期ボードリヤールの叙述スタイルについて検討し、そのポストモダン社会学としての社会理論を、ポストモダニティの社会学に変換する立場をとることを示した。その上で、後期ボードリヤールの社会理論である情報社会論的ポストモダン論を、三段階にわけて素描した。

キーワード：情報社会、ポストモダン、ヴァーチャリティ、悪

1 はじめに

1.1 問題関心

2007年に他界したフランスの社会理論家ボードリヤールは、消費社会論において顕著な業績を残したことで知られる。ボードリヤールは、消費を記号＝モノを利用したコミュニケーションとして分析する記号消費論を構築し、古典的マルクス主義の資本主義論と接合することで、後者を理論的に補完し、さらに、批判的検討をとおして、その限界を乗り越えた（ポストマルクス主義）、あるいはそれを試みたのである。それによれば、消費や消費者の欲求、消費財の機能は、決して自然な物質的な現象ではなく、記号システム、あるいは人為的な文化的制度、イデオロギーなのであり、だからこそ、過剰生産による恐慌を契機に自壊すると予想されたはずの資本主義経済システムは、消費を戦略的要素とすることで延命をなし遂げたという。多様な夥しい数の記号としての商品が市場にあふれてもなお、消費者が際限なく消費し続けることで、先進地域の資本主義経済システムは幾度かの不況を経験しながらも、20世紀をとおして発展をつづけてきたというわけだ²⁾。

ところが、ボードリヤールの後期の業績、とりわけ、1990年代以降の著作群は記号論的消費社会論として、あるいはそれを拡張、応用したものとして読むことが難しくなっていく。むしろ、後期の著作では独特な情報社会論が展開されていったようにみえる。記号論的消費社会論は情報社会論の一部として再解釈、再構成すべきかもしれない。とはいえ、1987年に大学の教授職を辞した後、ボードリヤールの叙述（エクリチュール）は端的にいて、それ以前に比して奔放になり、社会理論が体系的に示されてきたとはいいがたい。そのため、その理論の全貌を捉え、理解することは困難をとまなう。さらにいえば、後期ボードリヤール

の社会理論の全貌把握が果たされたとして、現代社会を分析するのに、それが貢献するとは限らない。それでも、とにかくそれを確かめるためにも、まずは、難波な後期ボードリヤールの主要な著作を検討し、情報社会論を素描する必要があるだろう。

1.2 本稿の構成

次節の2で、ボードリヤールの業績全体を振り返る。次に3では、後期ボードリヤール叙述の特徴を確認し、その扱いについて検討する。つづいて、4において、後期ボードリヤールにおける情報社会論について3つの段階から素描する。そして、最後の5において、今後の課題を示すことにしよう。

2 理論的軌跡

1960年代前半からはじまるボードリヤールの著作活動をふり返ると、社会理論に関する著作は1960年代後半から発表されるようになり³⁾、扱われるテーマからみると、記号論的消費社会論とそれによる古典的マルクス主義の理論的な補完と批判を試みる前期（『物の体系』（1968）から『象徴交換と死』（1976）まで）、『象徴交換と死』の後、ポストモダン論を展開する時期に分けることができる（表1）。なお、先行研究では Best and Kellner（1991）は“post 1976 writings”と表現し、同様の業績整理をしている（Best and Kellner 1991: 126）。

ポストモダン論は『フーコーを忘れること』（1977）から晩年の『なぜ、すべては消滅しなかったのか』（2007）までの30年にわたり展開されてきた。ボードリヤールのポストモダン論について簡単に確認すると、高度に発達した科学技術やメディア環境を背景にとりて議論されることに共通した特徴があるものの、おもに1980年代と90年代以降とでは、視点、内容、扱われる用語に違いがあるように思われる。1980年代は記号論、90年代以降は情報社会論の視点からポストモダン論を展開していったのではないか。本稿では、前者を「記号論的ポストモダン論」、後者を「情報社会論的ポストモダン論」として暫定的に区別しておこう。また、ボードリヤールの理論的軌跡としては、記号論的ポストモダン論は中期、情報社会論的ポストモダン論は後期として、時期を区分することを提案したい。

さて、記号論的ポストモダン論を概観しておく。そこでは、現代世界がイメージを実現した人工物としての記号＝シミュラクルによって構成されていることが主張される。モノ、人間、さらに経済、政治、性愛などの意識や行動、文化や芸術が記号＝シミュラクルとして把握される。さらに、シミュラクルのシステムでは、構成要素（辞項）は相互の差異によってのみ価値づけされ、つまり、構造的価値法則にしたがうコードにもとづくため、実在（the real）に基礎づけされないシステムの作動は不確実性を特徴とする。ボードリヤールにとって、こうした現代世界は「モダニティの終焉、あるいはシミュレーションの時代」（Baudrillard 1980）に入ったとして認識される。このように、記号の恣意性や差異性、記号による外界分節といった記号論の知見におもにもとづいて構成されていると考えられるため、本稿では、記号論的ポストモダン論としたわけである。

表1 ボードリヤールの理論的軌跡

主要テーマ	主要著作	区分
記号論的消費社会論	『物の体系』(1968)	前期
記号論的消費社会論	『消費社会の神話と構造』(1970)	
古典的マルクス主義の理論的補完	『記号の経済学批判』(1972)	
記号論的消費社会論 古典的マルクス主義批判	『生産の鏡』(1973)	
古典的マルクス主義批判 シミュラクル論	『象徴交換と死』(1976)	中期
	『フーコーを忘れること』(1977)	
	『誘惑の戦略』(1979)	
	「モダニティの終焉、あるいはシミュレーションの時代」(1980)	
	『シミュラクルとシミュレーション』(1981)	
	『宿命の戦略』(1983)	
ポストモダン論	『アメリカ』(1986)	後期
	『透きとおった悪』(1990)	
	『湾岸戦争は起こらなかった』(1991)	
	『完全犯罪』(1995)	
	『不可能な交換』(1999)	
	『テロリズムの精神』(2001)	
	『パワー・インフェルノ』(2002)	
『悪の知性』(2004)		
	『なぜ、すべては消滅しなかったのか』(2007)	

ここで3つ確認しておく、第一に、ボードリヤールは、記号論的ポストモダン論、とりわけ価値法則論とシミュラクル論を、実際にはすでに『象徴交換と死』(1976)で展開していた⁴⁾。とはいえ、それをポストモダン論として積極的に展開したのは、そのタイトルから明らかなように、「モダニティの終焉、あるいはシミュレーションの時代」(1980)や『シミュラクルとシミュレーション』(1981)からである。さらに誤解を恐れずにいえば、現代社会がポストモダン化を積極化させていくにつれて、ボードリヤール自身、本人の意図はともかくとして、理論的代弁者(イデオログ)の役割を果たしていったように見える。第二に、記号論的ポストモダン論はおもに記号論をもとに構成されていると考えられるため、記号論的消費社会論をその一部として適切に位置づけできる。端的に言えば、消費対象、消費者、消費は記号=シミュラクルとして適切に捉えられよう。第三に、ボードリヤールの社会理論から近代以降の社会を特徴づけるとすれば、モダンは産業(工業)社会、シミュラクルとほぼ同義であるが、多様なシミュラクルを包摂する概念として「シミュレー

ション」を定義すれば、ポストモダン「シミュレーション社会」、経済セクターに重点をおけば「消費社会」ということになるだろう。

以上のように、おもに80年代に、記号論的ポストモダン論が展開されたのであるが、90年に上梓された『透きとおった悪』からの議論は、記号論的ポストモダン論として把握することが困難になる。また、視点や扱われる用語、表現は社会学、人文社会科学に馴染みのないものが多々みられるようになっていく。たとえば、『透きとおった悪』では価値法則について、構造的段階は過去のものとなり、「フラクタル的段階」、あるいは「ウィルス的段階」に入ったことが指摘され、さらに「はっきりいえば、価値についてもはや語るべきではない」⁹⁾ (Baudrillard 1990 = 1991: 12) とし、それまでの議論との決別を宣言したかのようである。本稿では、90年代以降のポストモダン論を情報社会論的ポストモダン論とし、後節で素描するが、その前に次節で、後期ボードリヤールの叙述の特徴について検討しておこう。

3 後期ボードリヤールの叙述

構造主義、ポスト構造主義といった20世紀後半のフランス思想は、言葉遊び、擬人法、偽論理（詭弁）を多用し、科学用語を乱用、次々と論点を移動し、経験的リファレントによる論証を欠き、用語を無定義、あるいは多義的に用いるなどの点で、これまで批判されてきた (Sokal and Bricmont 1998=2000; 宮島 1982; 盛山 2000)。実際、ボードリヤールの社会理論には、時期を問わず、こうした特徴がみられ、社会理論が体系的に示されてきたとはいえない。そして、こうした傾向は80年代以降のポストモダン論から顕著になっていく。それでも、80年代の記号論的ポストモダン論は、おもに記号論にもとづくこともあって、それが理解の手がかりになっていた。だが、90年代以降の情報社会論的ポストモダン論にいたっては、上述したような20世紀フランス思想的な叙述スタイルは度を越したものになり、記号論を手がかりにすることも難しいことが多く、社会学とその関連分野以外の多様な概念を混在させて叙述している。そのため、情報社会論的ポストモダン論の全貌を理解することは、はなはだ困難な作業となる。だが、なぜ、そうした叙述のスタイルを採用するのだろうか。ボードリヤールは『不可能な交換』（1999）で以下のようにいう。

これまで私たちは決定論的な社会を決定論的に分析してきた。いまや、非決定論的な社会 (société indéterministe)——フラクタルで偶然的で指数関数的な社会、臨界状態の大衆と極端な現象からなる社会、流動的な関係にすべて支配された社会を、非決定論的に分析する必要がある (Baudrillard 1999=2002: 30)。

後期ボードリヤール全体の文脈から端的にいうと、ここでは度を越して急激に流動化し、諸現象が過激化してあらゆる領域に拡散する現代社会が、「フラクタル」「指数関数」「臨界」といった用語を比喩に語られている。それぞれの用語の意味内容を字義どおり読んでしまうと、むしろ理解の妨げになりかねない。とはいえ、「非決定論的な社会を非決定論的に分析する」とはどういうことか。次節でみるように、現代世界において、実在は情報に徹底的に変換され、流動化し、諸現象が多領域に拡散するという。おそらく、そうした現代世界の様態

を生き生きと描き出すために、ボードリヤールは多領域の用語を戦略的に錯綜させて叙述しているのではないか。後期ボードリヤールの最初の著作『透きとおった悪』（1990）は以下のエビグラフではじまる。

世界は錯乱的な事態に向かっているのだから、わたしたちも錯乱的な視点に向かわなければなるまい（Baudrillard 1990=1991: 4）。

さて、こうした後期ボードリヤールの叙述スタイルを、本研究ではどのように扱うべきであろうか。ボードリヤールと同様の錯乱した叙述スタイルを採用したのでは、後期ボードリヤールの情報社会論的ポストモダン論の全貌を把握し、その可能性と限界を見定めるのは難しいように思われる。ここで、参考になるのはマクドナルド化研究で知られ、米国におけるボードリヤールの社会理論の紹介者の一人でもあるリッツァの立場である。以下、簡単に確認しよう。

Ritzer（1997, 2004=2005）は Bauman（1992）の議論を参照し、「ポストモダン社会学」と「ポストモダニティの社会学」とを区別して、後者を採用した。「モダン（近代）」「ポストモダン（脱近代）」を時代区分概念として捉えると、ポストモダン社会（脱近代社会）は非合理性や非統合性などを特徴とし、これを「ポストモダニティ（脱近代性）」とすれば、それを合理的な方法で説明するのがポストモダニティの社会学である一方、ポストモダン社会学とは、ポストモダニティを非合理的な方法で説明するものといえよう。より具体的にいえば、概念を明確に定義し、諸概念の付置を検討し、多くの事例を精査し、秩序だった言説を構成するのがポストモダニティの社会学であり、関係性が不確かで、多様かつ定義の不確実な諸概念を駆使し、なかば無秩序な言説を構成するのがポストモダン社会学といえよう。Ritzer（2004=2005: 378-9）はボードリヤールの社会理論をポストモダン社会学として捉えているのだが、一連のマクドナルド化研究では、ボードリヤールの社会理論を領有し、ポストモダニティの社会学を展開し、さらに、ヴェーバーの合理化論と接合させることで、理論化に成功したといえよう。いわば、リッツァはポストモダン社会学をポストモダニティの社会学に変換したのである。

本研究においても、リッツァの立場を踏襲し、ポストモダン社会学としての後期ボードリヤールをポストモダニティの社会学に変換することで、情報社会論的ポストモダン論の全体像を捉えたい。要するに、ボードリヤールの叙述を敷衍し、概念を明確化し、諸概念の付置を検討し、関連する事例を検討して、情報社会論的ポストモダン論を捉えたい。とはいえ、そうすることで、後期ボードリヤールの社会理論について、見落とすものが出てくるかもしれない。だが、それはポストモダン社会学をポストモダニティの社会学に変換するプロセスで、変換しえないものとして残ると考えられ、それはそれとして取り出すことは可能だといえ、また、そうしたいと考えている。

4 情報社会論的ポストモダン論の素描

さて、後期ボードリヤールで展開された情報社会論的ポストモダン論を、本節では、3つの段階から素描していく。まず、各段階を箇条書きすれば以下ようになる。

- (1) 社会的領野の实在からの乖離と相互浸透
- (2) 社会的領野の情報への徹底した変換
- (3) 悪による情報システムの攪乱

第一の「社会的領野の实在からの乖離と相互浸透」は経済、政治、コミュニケーション、芸術（美学）、コミュニケーション、性愛といった社会的領野が、实在、言い換えると、現実の目的、起源、枠組みから離れて展開し、また、混淆していくことを指す。第二の「社会的領野の情報への徹底した変換」は、实在から乖離し、混淆した社会的領野が情報化することでヴァーチャル化（仮想＝潜在化）していくことを指す。そして、第三の「悪による情報システムの攪乱」については、社会的領野が情報システムとして展開するものの、社会的領野の一部の要素は情報システムに回収されずに、情報システムに抵抗するようになることを指す。

これら各段階の具体的な説明は後述するとして、先に3つの点を確認しておくとして、第一に、著作としてみれば、第一段階は『透きとおった悪』（1990）、第二段階は「完全犯罪」（1999）、第三段階は『透きとおった悪』、『悪の知性』（2004）でおもに展開される。第二に、先述したように、これらの各段階は高度に発達した科学技術やメディア環境を背景として議論される。そして、第三に、先述した記号論的ポストモダン論の場合がそうであったように、後期ボードリヤールの主張の一部はそれ以前の著作ですでに論及されている⁹⁾。

それでは、各段階について具体的にみていこう。まず、第一段階については、社会的領野が現実の目的、起源、枠組みなど、つまり、实在から離れて展開し、また、混淆していくとされる。たとえば、政治については、劇場化し、政権選択の選挙は、大衆芸能的な人気コンテスト、ショービジネス、勝敗至上主義的なプロスポーツの様相を呈していることが語られる（Baudrillard 1990=1991: 35-6, 59-60）。他にも、性愛については、高度に発達した外科手術による性転換や美容整形などをおして、性愛を無差別的で（*indifférente*）、操作的な（*opérationelle*）ものにしたとされる（Baudrillard 1990=1991: 32-9）。ボードリヤールのこうした議論では多様な概念が駆使される。たとえば、脱構造化、決定不能性、エクスタシー、「社会的なるもの（*le social*）」の終焉、無、超・（*trans-*）、置換、混同、拡散、相互転移、ウィルス、クローン、不可能な交換などである。このうち、超・（*trans-*）について説明すると、たとえば、価値や理念の実現といった本来の目的をなかば離れ（単に名目的なものとし）、劇場化した政治の娯楽化ともいえる状況が、「トランス・ポリテイク」の一樣態として語られる。また、こうした議論で、ボードリヤールはマクルーハンのメディアによる人間拡張論に依拠している。とはいえ、後期ボードリヤールをとおしていえることであるが、ボードリヤールはマクルーハンに比して、メディア技術の発展に悲観的である。また、ボー

ドリヤールは技術決定論、メディア決定論をとっているとは——そのような記述は多々あるものの——断定できないように思われる。情報社会論的なポストモダン化（第一段階～第三段階）が、社会の近代化の推進した科学技術の発展の帰結であるとすれば（Baudrillard 1990=1991: 18）、それは一概に高度に発達したメディア技術によって決定されたとはいえず、むしろ社会によって決定されたとみることでもできるからだ（社会決定論）。

次に、第二段階は、実在から乖離、混淆した社会的領野が情報に徹底的に変換され、ヴァーチャル化し、仮想的=潜在的（virtuel）になることを指す。具体例としては、経済の情報化によって、投資、労働、消費行動が情報操作となっていることが指摘される（経済主体=情報のオペレーター）。マクロ的にみれば、国際金融資本の情報化された投機的な取引からなる虚構経済の総額は、現実経済（実物経済）の生産額を大幅に上回り、前者が経済セクターの中心となり、自立、展開していることが指摘される（Baudrillard 1990=1991: 40-52, 1999=2002: 11）。さらに、芸術についていえば、社会的領野が情報に変換されることで、芸術によって実在を表象することは不可能になり、芸術が自立して展開していることが、デュシャンやアンディ・ウォーホルを事例として指摘される（Baudrillard 1990=1991: 24-31, 1995=1998: 48-9）。このように実在から乖離した社会的領野は情報に変換され、情報システムが形成され、その結果、実在が消滅する（disparition）事態を、ボードリヤールは「完全犯罪」と呼ぶ。結局のところ、実在とされるものがあるとしても、それは情報システムの不確実な作用の効果に過ぎず、それらの現象は、接頭辞「非・(non-)」を付して記述される。すなわち、非・場所、非・身体、非・出来事、非・文化である。さらにいえば、そうした情報の効果としての実在は、ハイパーリアルなシミュラクル（シミュレーション）と呼ばれ、情報に変換される以前の実在以上にリアル（現実的）であることが指摘されるが、これらの用語は周知のとおり、中期の記号論的ポストモダン論から使われているものである。

さて、最後に第三段階についてだが、第二段階の実在から乖離した社会的領野の情報への徹底した変換によって形成された情報システムは、善、肯定性のみを追求し、システムにとって従順な要素のみを管理下におこうとするという。他方、「悪（mal, evil）」、言い換えると、否定性、暴力、病い、有毒性、呪われた部分（濫費）、不均衡、異物性、他者性、特殊性を絶滅=脱項化（extermination）しようと情報システムは腐心する。しかしながら、悪の絶滅は果たせず、悪はシステムに抵抗、その作動を攪乱しようとする。ただし、悪の抵抗=攪乱はシステム外ではなく、システム内で、システムの論理にしたがって展開、拡大していくことが重要である。これをボードリヤールは「悪の透明性」と呼び、コンピュータウィルス、チェルノブイリ原発事故と放射能汚染、テロリズム（9.11）などを事例に議論する（Baudrillard 1990=1991: 113-122, 2002a=2003）。9.11の世界同時多発テロ、ボードリヤールの他界後ではなるが、3.11の東日本大震災などは、システムによって事前に予測された非・出来事（non-événement）ではなく、予測不能だったという意味で、無から生じた（ex nihilo）出来事ということになろう（Baudrillard 2002b=2003: 80）。

しかし、悪をめぐるボードリヤールの議論はこのように一元的に捉えることは困難かもしれない。異色のフランスの作家セガレンのエグゼティズム論（Segalen 1978=1995）から着想をえた「根本的な他者性（altérité radicale）」（Baudrillard et Guillaume 1992; Baudrillard 1990=1991:187-236）、蜜蜂の寓話（マンデヴィル）や呪われた部分の蕩尽（バタイユ）にみ

られるように、悪はシステムを形成する効果を果たす場合もあり、それについても、後期ボードリヤールでは論じられているのである。そのため、悪の概念についてはより詳細な検討が必要だろう。

5 結論——今後の研究に向けて

さて、本稿ではここまで、ボードリヤールの理論的軌跡を振り返り、後期ボードリヤールを、90年代以降の情報社会論的ポストモダン論を展開する時期として、位置づけることを提案し、さらに、後期ボードリヤールの叙述スタイルについて検討して、そのポストモダン社会学としての社会理論を、ポストモダニティの社会学に変換する立場をとることを示した。その上で、後期ボードリヤールの社会理論である情報社会論的ポストモダン論を、三段階にわけて簡単に素描した。

今後の課題としては、第一に、情報社会論的ポストモダン論の各段階について、豊富な事例をあげて検討し、諸概念の定義、付置を明確にすることが何より必要である。ボードリヤールの社会理論は、80年代以降、とかく現実離れしたSF的なものとして理解されがちであったが（cf. Hall 1986=1998）、近年の情報化の加速した状況を見ると、必ずしもそうとはいえないように思われる。たとえば、イスラム地域でSNSを利用して爆発的に展開した近年の民主化運動（ジャスミン革命）は、情報社会論的ポストモダン論の第二段階的な現象の事例として理解することが適切かもしれない（Baudrillard 1990=1991: 111）。第二に、第一の課題を遂行した後、後期ボードリヤールの情報社会論的ポストモダン論を、既存のメディア研究、メディア社会学の視点から評価する必要があるだろう。それにより、後期ボードリヤールの社会理論の学術的な価値を見定めることが可能となり、そこで程度はともかく肯定的な評価がえられれば、ボードリヤールの社会理論の可能性が開かれていくことになるだろう。

[注]

- 1) 本稿は科学研究費補助金基盤研究C（一般）研究課題番号24530618の研究成果の一部である。
- 2) ボードリヤールの記号論的消費社会論、後述する記号論的ポストモダン論については以前、包括的な再構成をおこなった水原（2005）を参照。
- 3) 具体的にいえば、マクルーハンについて論じた Baudrillard（1967）から、ボードリヤールの社会理論に関する著作は開始したと考えられる。
- 4) 実際には前期の最初期の著作、『物の体系』にもシミュラクル（シミュレーション）に関する記述を見いだすことができる（Baudrillard 1968=1980: 143）。
- 5) ボードリヤールの重要著作のほぼすべては、今村仁司、塚原史らの精力的な訳業によって、邦訳で読むことができ、本研究でも負うところが大きい。本稿での引用は、これら先達の優れた仕事を参照しながら、原著から訳出したものであり、そのため、訳語や表現が邦訳とは必ずしも一致しない。

- 6) たとえば、『象徴交換と死』(1976)における政治行動に関する議論は第二段階の主張を先取りしたものだといえる (Baudrillard 1976=1992: 143)。

[文献]

- Baudrillard, J., 1967, "Compte rendu de Marshall McLuhan: Understanding Media," *L'Homme et la Société*, 5: 227-30.
- , 1976, *L'Échange symbolique et la mort*, Paris: Gallimard. (= [1982] 1992, 今村仁司・塚原史訳『象徴交換と死』筑摩書房.)
- , 1980, "La fin de la modernité ou l'ère de la simulation," *Encyclopædia universalis*, vol.17, 26-35.
- , 1981, *Simulacres et simulation*, Paris: Galilée. (= 1984, 竹原あき子訳『シミュラクルとシミュレーション』法政大学出版局.)
- , 1983, *Les stratégies fatales*, Paris: Grasset. (= 1990, 竹原あき子訳『宿命の戦略』法政大学出版局.)
- , 1986, *Amérique*, Paris: Grasset. (= 1988 a, 田中正人訳『アメリカ』法政大学出版局.)
- , 1990, *La transparence du mal: Essai sur les phénomènes extrêmes*, Paris: Galilée. (= 1991, 塚原史訳『透きとおった悪』紀伊國屋書店.)
- , 1991, *La guerre n'a pas eu lieu*, Paris: Galilée. (= 1991, 塚原史訳『湾岸戦争は起こらなかった』紀伊國屋書店.)
- , et M. Guillaume, 1992, *Figures de l'altérité*, Paris: L'Association Descartes. (= 1995, 塚原史訳『世紀末の他者たち』紀伊國屋書店.)
- , 1995, *Le crime parfait*, Paris: Galilée. (= 1998, 塚原史訳『完全犯罪』紀伊國屋書店.)
- , 1999, *L'Échange impossible*, Paris: Galilée. (= 2002, 塚原史訳『不可能な交換』紀伊國屋書店.)
- , 2000, *Mots de Passe*, Paris: Pauvert. (= 2003, 塚原史訳『パスワード』NTT 出版.)
- , [2001] 2002a, *L'Esprit du terrorisme*, Paris: Galilée. (= [2002] 2003, 塚原史訳「テロリズムの精神」『パワー・インフェルノ』NTT 出版, 5-44.)
- , 2002b, *Power inferno*, Paris: Galilée. (= 2003, 塚原史訳「パワー・インフェルノ」『パワー・インフェルノ』NTT 出版, 45-118.)
- , 2002 c, 『暴力とグローバリゼーション』NTT 出版.
- , 2004, *Le pacte de lucidité ou l'intelligence du mal*, Paris: Galilée. (= 2008, 塚原史訳『悪の知性』NTT 出版.)
- , 2007, *Pourquoi tout n'a-t-il pas déjà disparu?*, Paris : Herne. (= 2009, 塚原史訳『なぜ、すべてがすでに消滅しなかったのか』筑摩書房, 9-47.)
- Bauman, Z., 1992, *Intimations of Postmodernity*, London: Routledge.
- Best, S. and D. Kellner, 1991, *Postmodern Theory: Critical Interrogations*, New York: Guilford Press.
- Hall, S., 1986, "On Postmodernism and Articulation: An Interview," *Journal of Communication Inquiry*, 10(2): 45-60. (= 1998, 甲斐聰訳「ポストモダニズムと節合について——スチュアート・ホールとのインタビュー」『現代思想』26(4): 22-43.)
- Ritzer, G., 1997, *Postmodern Social Theory*, New York: McGraw-Hill.
- , 2004, *Globalization of Nothing*, London: Pine Forge Press. (= 2005, 正岡寛司監訳, 山本徹夫・山本光子訳『明石ライブラリー78 無のグローバル化——拡大する消費社会と「存

在」の喪失』明石書店.)

宮島喬, 1982, 「アノミー論から消費社会論へ——ひとつの覚書」『現代思想』10(7): 66-71.

水原俊博, 2005, 「ボードリヤールの社会理論と日本の80年代消費社会」立教大学社会学研究科
2005年度博士論文.

盛山和夫, 2000, 『権力』東京大学出版会.

Sokal, A., and J. Bricmont, 1998, *Fashionable Nonsense: Postmodern Intellectuals' Abuse of Science*, New York: Picador. (=2000, 田崎春明・大野克嗣・堀茂樹訳『「知」の欺瞞——ポストモダン思想における科学の乱用』岩波書店.)

Segalen, S., 1978, *Essai sur l'exotisme*, Montpellier: Fata Morgana. (=1995, 木下誠訳「〈エグゾティズム〉に関する試論」『シリーズ【越境の文学／文学の越境】〈エグゾティズム〉に関する試論／羈旅』現代企画室, 125-214.)

The Sociological Consideration of the Later Baudrillard's Social Theory

Mizuhara, Toshihiro

(Shinshu University, Faculty of Arts)

Keywords: information society, postmodern, virtuality, evil

(2013年10月31日受理, 12月6日掲載)

